



「福澤育林友の会」ニュース

第25号 発行日2014年1月10日

福澤育林友の会
東京都港区三田2-15-45 慶應義塾 管財部
TEL:03-5427-1050 FAX:03-5427-1190
<http://www.f-ikurin.jp>



「年頭にあたって」

福澤育林友の会
会長 渡部 直樹
(慶應義塾常任理事)

新年おめでとうございます。2014年が皆様にとって素晴らしい年になりますよう、お祈りいたします。

昨年3月9日に2013年「幼稚舎の杜」植樹が行われました。この模様を、福澤育林友の会の海瀬亀太郎氏がとても素敵な写真冊子にまとめられています。この冊子には、それぞれのスナップに短いコメントが添えられています。幼稚舎生が塾長や先生方と一緒に植樹しているスナップ、森林組合の方々からお話や説明を受けているスナップ等々があり、そして冊子の最後のページには「楽しい1日でした 皆さん有難う 今日植えた木が10年後には」という海瀬さんのコメントがつけられていました。



私は、日吉の大学1年生の時に地理学の講義で、担当の先生(お名前は忘れましたが)から「親 - 立木を見る」という漢字の解釈を習ったことを憶えています。この解釈については、諸説紛々であることは後に知ったのですが、かの先生の解釈は「植樹した若木が大きな立木となるには長い年月がかかる。植樹を行った親はすでに亡くなり、子供は、立木を見ることで親を偲ぶ」というものでした。もちろん、私は、この説自体が正しいかどうかはわかりませんが、それはともかく、森や木は、関わった個人のものではなく、次世代、つまりみんなのものということ強くおっしゃったのだらうと思われま。

みんなのものとは、いわゆる公共財もしくは共有財のことです。それは一般に、純粋な私有財ほど大切にされません。公衆トイレが自宅のトイレよりも汚いと同じです。多くの人は「公衆トイレは、次に使う人が汚すかもしれない。それならば、きれいに使うのをやめよう」と考えます。だから汚くなるのです。空気も水も代表的な公共財です。

みんなのものを大切にすることは、個人の気品の問題であり、社会の文化水準の指標となるといっても過言ではないでしょう。空気も水も、まさに木や森が育みます。森で過ごす時間は、私たちにみんなのものの大切さを教えてくれると思います。

最後に、福澤育林友の会の皆様に、これからも変わらぬご支援をお願い申し上げ、新年のご挨拶とさせていただきます。



<http://keiogoods.jp/>

【事務局からお知らせ】

平成25年8月より、三田・日吉・矢上・信濃町・湘南藤沢の各キャンパス内自動販売機で「慶應の水」の販売を開始しております。

湘南藤沢キャンパスの学生と玉村雅敏(総合政策学部准教授)研究室が行った富士山麓の地下水を用いた地域活性化に関する調査研究や、鹿園直建名誉教授(元理工学部教授)による富士吉田市の地下水の水質等に関する研究成果をもとに企画され、「慶應の水」ができました。売上金は、地域活性化の諸活動や環境保全、奨学資金に活用されます。

慶應義塾公式グッズページで通信販売を行っております。(24本入り1箱3,000円/税・送料込)



昭和 40 年高村象平塾長(当時)は「義塾は百年続いてきた。これからも百年、二百年続くわけだから“永遠の財産”として学校林があってもいい。今は間に合わなくても、半世紀のちの若い人たちが恩恵を得ればそれでいいじゃないかと思ってね。」と福澤諭吉記念基金(現福澤諭吉記念学事振興基金)の基盤を確立する一方策として森林の造成を考えられた。塾出身の林業家による林業三田会が高村塾長の呼びかけに応え寄附した山林が基となり、財団法人福澤記念育林会(以下、育林会)が設立された。育林会では東北関東を中心に財団所有もしくは分収林として山林を維持してきたが、設立から半世紀が近づくころには、管理費用はかかり続ける一方、木材価格は大幅に下落し、半世紀のちの若い人が恩恵を得ることは期待できない状態となっていた。

しかし、環境問題や森林への関心が高まりつつある平成 8 年、塾長と植林体験の旅が開催され塾生が林業三田会会員とともに志津川山林(宮城県)を訪れた。その後、志木高生による志木の森(三重県)や、幼稚舎生による幼稚舎の杜(静岡県)、大学生のサークル慶應フォレストクラブ(当時)による清水の森(和歌山県)など塾生の体験学習、学びの場として山林が活用されるようになった。また同じころ福澤育林友の会が設立され「森を愛する人々の集い」や研修旅行、この「友の会ニュース」を通じて、広く森と人とのかわりや慶應義塾の森に触れて頂く場ができた。

公益法人制度の変更に伴い、平成 23 年 4 月より育林会は財団法人としては解散し、学校林は慶應義塾の所有となった。同年 6 月の「森を愛する人々の集い」会場において、長谷山常任理事より「慶應義塾学校林を巡る展望」の講演があり、その中で「新しい林学の創造」・高度なマネジメント能力を有する人材の育成・日本林業が蓄積してきた専門知識、経験、技能の伝承・産官学による教育研究の展開を目指す」と発表された。その第一弾として、湘南藤沢キャンパス(SFC)において講座が設置されることとなった。

一年程の準備期間の後、本年 9 月より三井物産株式会社による寄附講座として「フォレスト・プロダクツ論」が開講となった。担当教員は、総合政策学部飯盛義徳准教授、安藤直人特任教授(東京大学名誉教授)である。安藤教授は木質材料学、木質構造学が専門であり、東京大学弥生講堂等を企画している。

【講義概要(湘南藤沢キャンパス 2013 年度秋学期シラバスより抜粋)】

本授業は新しい林業のあり方を産業面(林産学)から考察する授業である。日本は森林資源に恵まれ、木造の歴史、文化がある一方、欧州と違い産業として成立しているとはいいがたい状況であった。昨今では、新しい取り組みが各地で生まれ、林業の活性化こそが地域活性化の起爆剤となるという期待もある。本授業では多彩なゲストを迎え、林業、林産業の現状をつぶさに学び、木材の特質、住宅産業の取り組みなどを交えて多角的な視点で森林資源をとらえ、これからの木材利用の可能性について議論する。そして林業の再生から、地域日本社会活性化の道筋を検討し、慶應義塾にふさわしい社会の先導者の育成を目指す。

【授業計画】

1. 木を知る
2. 木を使う
3. 木を活かす
4. 木造建築のススメ
5. 木材利用から考える資源活用と産業
6. 建築経済と流通
7. 木材市場見学
8. 企業が所有する森林の意義
9. 総合討論
10. 日本の林業と森林の将来像
11. エコプロダクツ見学
12. 木材産業の可能性
13. 木の常識 / 非常識
14. フォレスト・プロダクツ論の総括

このうち第 9 回総合討論の会において 30 分程の時間を頂戴し、林業三田会の海瀬隆太郎氏と吉田により前述の慶應義塾学校林の歴史を紹介し、またその活用方法のアイデアを出席カードに記載してもらった。アイデアの中には、SFCらしい新しい切り口のものもあり興味深いものであった。第 10 回日本の林業と森林の将来像では、林業三田会の速水亨氏により世界の森林問題、日本の林業の現実、速水林業の育林、違法伐採、森林認証(FSC: Forest Stewardship Council)等についての講義が行われた。蛇足ながら SFC(湘南藤沢キャンパス)で FSC の講義が行われたことは初めてではなからうか? 10 年程前は良く言い間違えられていたのを思い出した。なお、授業では如何に木を活かし、使うことが意義深いかといったことが伝えられているが、使用されている教室を含め SFC の建物は小規模なものが大半であるにも関わらず、ほとんど木が使われていないのが残念だ。小生が在学中にも感じていたが、是非これからの塾の施設には積極的に木を使って頂きたいものである。この授業は 1 月まで行われるが、5 限の遅い時間の講義であるにも関わらず、出席率も高く学生の関心の高さが窺える。来年度以降もこの講義が発展し、受講した学生の中から森林や林業、林産業の分野において真のリーダーとなる人材が生まれることを期待している。

今年の研修旅行はいよいよ海瀬亀太郎さんのお膝元、紀州和歌山の旅ということで、出発前からわくわくしていた。育林友の会の研修旅行は、全く他の旅行と違って特別なものになる。それは、海瀬さんが下見をされ、それぞれの受け入れ先の皆さんと入念に打ち合わせをしてくださるからだと思う。だが、なかなか「次回は和歌山の清水の森」というお話にならない。ようやく「第 10 回を記念して 2 泊 3 日で」となったのが一昨年だった。定員は瞬く間に埋まり、私は不覚にもキャンセル待ち。ようやく滑り込んで切符の手配を済ませたら、未曾有の豪雨で和歌山県下大被害のニュース。当然のことながら旅行は中止となった。



串本の夜明け

それから 2 年、まだ災害の爪跡は各地に残されているものの仕切り直しとなった。あいにく今回、亀太郎さんは体調を崩され入院されていた。しかし、代役を務めた息子さんの隆太郎さんと元和歌山県職員の後藤さんの案内はすばらしく、宿も、食事も、お話もなかなかで、旅行は期待に違わないものとなった。最終日には、亀太郎さんも東京の病院を抜け出し高野山を歩いて参拝。一同まずは一安心した。

ところで、前回の計画では田辺の南方熊楠顕彰館の訪問が予定されていたが、今回は消えていた。私は個人的に外せないと考えたので、初日の白浜空港行を早朝の便に早め、確保した 3 時間で白浜町の南方熊楠記念館と田辺市の顕彰館を訪ねることとした。タクシーをチャーターしても二つを回って集合時間に間に合うか不安だったが、どちらも大きな施設ではなく、運転手さんもがんばってくれたので、駆け足とはならなかった。



熊野速玉大社

私が南方熊楠に興味をもったのは、留学先の大先輩であることが分かったためである。一般的ないくつかの伝記に共通の記述として、熊楠はミシガン州立大学の前身であるミシガン農学校に明治 20 年(1887 年)に入学したが、授業の水準に失望し出席せず、後に日本人留学生と米国人学生との間で起こった乱闘事件の責任を引き受け退学したとなっている。喧嘩の原因は、留学生たちが校則に違反して寄宿舎で飲酒したことにあった。

柳田國男が「日本人の可能性の極限だ」と評したという南方熊楠、知れば知るほどその巨人ぶりが後輩として誇らしく思えるのだが、必ずこのエピソードがついてくる。最近になって熊楠の付けていた日記だけでなく、他の史料、たとえば大学に保存されていた熊楠の校長宛の書状などから別の真相も見えつつある。しかし、熊楠愛好家の間では「ミシガン農学校はレベルが低かった」ことがほぼ定着してしまっていて残念である。ところが、今回顕彰館で私にとって救いのようなお話をうかがうことができた。南方松枝夫人の遠縁にあたる橋本邦子さんからだ。

橋本さんは顕彰館の旧熊楠邸部分の管理をされていて、当日も熊楠が親戚に宛てた手紙の整理の手を休めて私にお付き合いいただいた。「当時熊楠を満足させる授業なんて、どこにもなかったと思いますよ。たとえば、大学予備門にせっかく入ったのに、大森貝塚は有名ですが、あと暇があれば寄席通いして授業なんかほとんど出なかったんですから。」



旧熊楠邸

熊楠は明治 17 年、夏目漱石、正岡子規、そしてもちろん秋山真之と同期で大学予備門に入学している。まさに「坂の上の雲」のあの世代である。司馬遼太郎が小説の中で描かなかったこともあり、これらの関係はこれまであまり注目されてこなかった。だが今はなぜ、この誰よりも国際的な人物を、司馬が登場させなかったかに注目が集まっているという。

南方熊楠が起こした神社合祀反対運動は、日本における自然保護運動の先がけとされている。熊楠無かりせば、熊野古道は世界遺産どころか、今のように残っていたかと疑問視する人もいる。今回の旅でも、いたるところで「南方熊楠」という名前が耳に飛び込んできた。先の水害からの復興はまだ道半ばで、多くのがけ崩れ跡がそのまま残されていた。ほとんどの場所が急峻地に植林された針葉樹林だったこと、とても残念に思えた。[写真：筆者撮影]

志津川慶應の森に山小屋を建設することになりました。竣工は平成 26 年 3 月末予定で、主として林業三田会様、そして紀州和歌山を訪ねる旅(平成 25 年 9 月実施)の参加者有志から、建設のために頂いた寄附金(累計額 5,150,000 円)と、友の会からのこれまでの支援金が財源です。

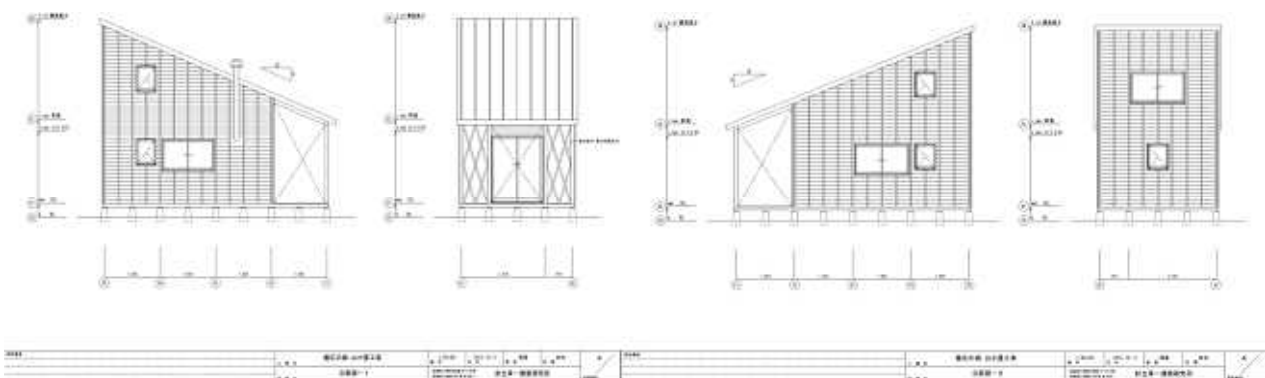
この山小屋は、南三陸プロジェクトをはじめとするボランティア活動や、様々な教育・研究活動(生物の生態観察・調査等)の際、着替え、休憩や一時避難する場所として活用されるもので、これまでの諸活動時の不便が解消されます。南三陸町(志津川)復興への支援、後押しにつながることを願います。



位置図

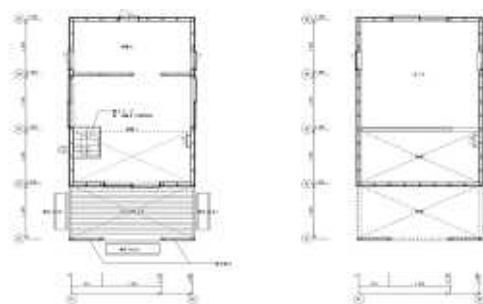


現地建設予定場所(平成 25 年 9 月 27 日撮影)



立面図 1(西・南面[正面入口])

立面図 2(東・北面)



平面図

建物概要

構造・面積等

- (a)構造 木造 平屋建て(ロフト)
- (b)建築面積 26.50 m²(8.02 坪)
- (c)延べ面積 39.64 m²(12.00 坪)
- (d)主要室 部屋 1[8 畳]・部屋 2[4 畳]・ウッドデッキ
- (e)設備等 外部仮設男女トイレユニット(2 基)
外用流し台(1 台)・薪ストーブ(1 基)
LED スポットライト(2 台)
ガスパワー発電機(1 台)